
友達や保育者と一緒に園生活を楽しむために

～3歳児 Y男の姿を通して～

多治見市立明和幼稚園 教諭 高木 優里

概要

3歳児の子どもにとって、幼稚園生活は初めての集団生活であり社会生活の第一歩でもある。大勢の友達や初めて出会う保育士との生活は、私たち大人が想像するより不安や戸惑いが大きく、集団生活に慣れるまでに時間がかかる子どももいる。

今年4月に施行された新幼稚園教育要領では、幼稚園教育の基本は、**幼児期の特性を踏まえ環境を通して行うものである**と述べている。さらに、重視する点として「**幼児期にふさわしい生活の展開**」「**遊びを通しての総合的な指導**」「**一人一人の発達の特性に応じた指導**」が挙げられている。こうしたことに留意し、一人一人の子どもの行動や思いに心を寄せつつ意図的・計画的に保育を展開することが、新幼稚園教育要領が示す「**幼児期の終わりまでに育ってほしい姿**」につながっていくのではないかと考える。特に集団生活が始まったばかりの3歳児にとっては、その発達の特性を理解し、具体的な指導・援助の方法を探っていかなければならない。

I. 研究テーマ設定理由

クラスの中には、いろいろなものに興味関心をもち、自分の思いを出して保育者や友達との生活を楽しめる子もいるが、新しい環境になかなか慣れることができず、一日の大半を泣いて過ごす子や自分の思いを上手く表現できない子も多い。初めての集団生活であれば、不安や戸惑いを感じることはごく当たり前のことであり、子どもたちが安心して園生活を送れるよう、一人一人をよく理解し、日常生活の中で何に興味関心を抱いているのか、何につまずいているのかを捉えることが必要であると感じている。

また、身近な保育士や友達の存在に気づき信頼関係を築いていくことで“やってみたい”という意欲がわき“楽しかった”という充実感を味わうことができるのではないかと考えた。

Y男は、入園当初不安定でよく泣き、友達との

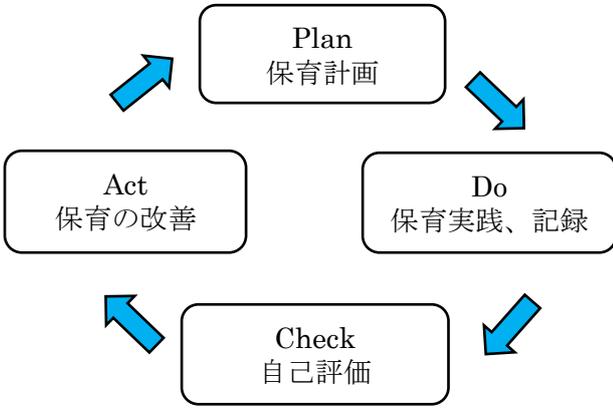
トラブルも多かった。家庭とは違う環境の中で戸惑うY男の姿は、他の多くの子もたちと同様に3歳児らしい姿である。しかし、集団生活を楽しみ、のびのびと遊ぶ姿も本園の研究主題にも挙げられた3歳児の大切な願う姿である。そこで、Y男の姿を通して幼児への理解を深め、適切な環境構成や指導援助のあり方について探っていこうと考えた。

II. 研究仮説

Y男の発達や内面の理解を深め、場面に応じた環境構成、言葉掛けや援助を工夫することにより、園の生活や友達との遊びを楽しむことができるようになるのではないかと考えた。そのために、幼児理解に基づいたPDCAサイクル(図1)『保育計画(Plan)→保育実践、エピソード記録(Do)→自己評価

(Check)→保育の改善(Act)』を基に保育を進めていく。

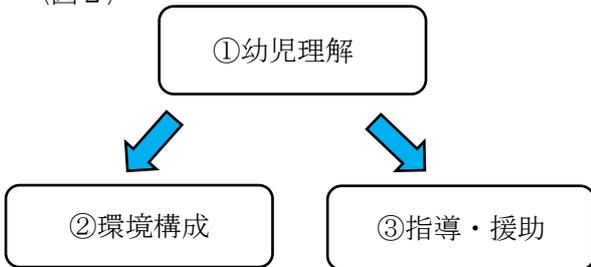
〈図1〉



Ⅲ. 研究内容

- ① エピソード記録と評価による幼児理解（捉え）
日々の保育記録から研究主題に関わるエピソードを抽出し、幼児の内面や家庭的背景など客観的に捉える。
- ② 友達や保育者と一緒に遊びたくなるような環境の工夫
友達の存在が意識できるような環境、思わず“やってみよう”と心が動くような環境を意図的に構成する。
- ③ 発達の特徴を踏まえた指導・援助
幼児には共通した発達の筋道があるといわれている。そうした発達の特性を踏まえた柔軟かつ丁寧な指導・援助を行う。

〈図2〉

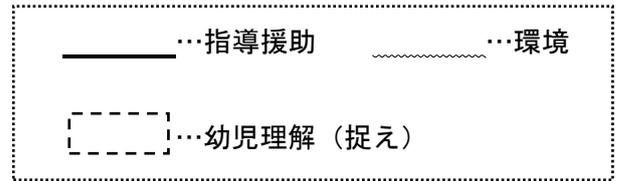


※①に基づいた②③のPDCAサイクルによる実施と検証

Ⅳ. 研究実践

Y男のプロフィール

- ・父、母、兄、本児の4人家族。
 - ・8月生まれ。
- <4月当初の姿>
- ・慣れない環境で毎朝、保護者と離れる際に泣き、日中も不安で落ち着かない様子。
 - ・ブロックを使って遊ぶことを好み、一人遊びをしていることが多い。友達との関わり方が分からず、思いが通らないと相手に向かって激しく怒ったり、衝動的に物を取ったりする。
 - ・食べ物の好き嫌いが激しい。
 - ・落ち着いて話を聞くことが難しい。



実践1. 子どもの気持ちに寄り添う 「園生活スタート」:4月

入園後、毎日祖母と別れる際に「おばあちゃんがいい！」と大きな声で泣いて別れる日が続いた。「そうだね。おばあちゃんがいいよね。」と気持ちを受け止めながら抱っこをし、落ち着いてから好きなブロック遊びに誘うようにすると、少しずつ泣かずに過ごせる時間が長くなってきた。

しかし、いつも11時頃になると機嫌が悪くなり泣きだすことが多かった。祖母に話を聞くと入園前は毎日11時頃に昼寝をしていたことが分かった。「Y男くん、眠い？お昼寝する？」と聞くと「うん。」と言い、自ら布団に寝転がる姿があった。しばらくの間、園でも家と同じように11時頃から1時間弱昼寝をするようにした。起床すると少しすっきりとした表情をし、機嫌良く過ごせる時間が増えてきた。

〈捉え〉

入園するまで一日の大半を祖母と過ごしていたので、慣れない環境で離れて過ごすことに不安を感じていたのだろう。

集団生活の経験がないY男にとって、生活リズムの変化は精神的にも身体的にも負担が大きかったのではないかな。

〈考察〉

入園前の生活リズムを知り、体を休ませる時間を保障したり、Y男の不安な気持ちに寄り添ったりすることで、信頼関係もでき落ち着いて過ごせるようになったと考えられる。

3歳児は家庭生活の影響を受けやすいので、保護者としっかり連携し、情報を共有したうえで子どもの姿を受け止め、園が居心地のいい場所になるよう温かい雰囲気づくりをすることが大切である。

保育者：「S男くんかっこいいの作ってるもんね。でも何も言わないで持っていてもいいかな？」

Y男：(首を横に振る)

保育者：「そういう時は、貸してって聞いてみるといいよ。」

まずは気持ちを受け止め、言葉で伝えることを知
らせた。すると「貸して。」と伝えることができた。

〈捉え〉

相手にも思いがあるということに経験を通して気づき始める3歳児だが、Y男は大人に囲まれた生活で、他者とぶつかって自分の気持ちを調整していく機会が少なかったのではないかな。そのため自分の思いが先行し、友達が使っているものを持って行ってしまったのだろう。また、自分の思いを言葉で十分に伝えることが難しい時期でもあるため、一見すると自己中心的な行動をしてしまったのではないかな。

実践2. 子どもの気持ちを代弁する

「ブロック遊び」:6月初旬

Y男は落ち着かず、衝動的な行動をすることや思いが通らなると激しく泣いて怒る姿があり、友達とのトラブルも多かった。

ブロック遊びが好きなY男とS男は、いつも近くで遊んでいた。Y男はS男が使っているブロックを、何も言わずに持って行こうとして、トラブルになることが多く保育者がその都度お互いの思いを伝え橋渡しするようにした。

ある日、Y男が大きな声で泣き始めた。

保育者：「Y男くんどうしたの？」

Y男：「・・・」

S男：「Y男くんが取った！」

保育者：「Y男くん、S男くんの取っちゃったの？」

Y男：「・・・」

保育者：「もしかしてS男くんが持っている、これが欲しくなっちゃったのかな？」

Y男：(うなずく)

〈考察〉

心の中で話したいことがたくさんあってもまだうまく言葉で表現できない3歳児である。

幼児期の言葉の発達は個人差が大きく表現の仕方も自分本位なところがあったりする。保育士がY男の話や、その背後にある思いを理解し、状況に応じて言葉を付け加えたり、思いを聞き出したりして仲立ちすることで、相手の思いに気づけるような援助をすることが必要である。

実践3. 好きな遊びを十分に楽しむ環境づくり

「うさぎのサーキット遊び」:5月中旬

Y男は、園庭を走り回ったり、ブロックで電車や飛行機を作って走らせたりして遊ぶことが多く体を動かして遊ぶ活動が好きなのではないかと考えた。

そこで、クラス名で親しみのあるうさぎのパペ

ット人形からサーキット遊びを提案し、室内にマットで作った山、リング、子どもたちで作ったトンネルなどのサーキットを構成した。Y 男は興味をもって喜んで参加していたが、友達を押しのけたり、友達から「順番だよ！」と言われたりして怒って泣く姿があった。

そこで、十分体を動かすことができるよう遊戯室にサーキットを移し、内容を山、ジャンピング、パンチングなど充実させるとともに、子どもたちと作ったにんじんを使ってごっこ遊びができるスペースを作った。〈写真1〉Y 男は、「うわー！やりたい！」と大喜びで、トラブルも少なく泣いて怒ることなく繰り返し楽しむ姿が見られた。

〈捉え〉

3 歳児は、興味を持ったことに素直に夢中になれるが、周りを見て行動することや友達も遊びたいということに気づくのは難しいため押しつけたり、怒ったりしたのではないか。

遊びたい気持ちが強いY男にとっては、混雑したり待ったりする時間は苦痛で、十分遊びこむことができなかつたのだろう。

〈考察〉

周りに目を向けていくことや友達との関わりも大切にしていきたいが、まずは子どもの“やってみたい”“遊びたい”という気持ちに共感し、自分の好きな遊びを十分に楽しめるようにすることが一番重要であると考えた。十分遊び込めるように環境構成したことで充実感を味わい、園での遊びが楽しいと思える活動になったと考える。

〈写真1〉

【うさぎにあげる餌】



実践4. 思わず遊びたくなる環境づくり

「段ボールのおうちごっこ」:7月初旬

自分の好きな遊びを楽しみつつも、Y 男にも友達と遊ぶ楽しさを感じてほしい、そのために自然に友達と触れ合えるような環境を作りたいと思い保育室の一角に段ボールで家を作ってみた。

〈写真2〉

登園し家を見つけると Y 男も他の子どもたちも興味を持ち、中に入って様子を見ていた。

数人の子どもたちは友達と家の中のキッチンでままごとを始めたが、Y 男は家から出てきてブロックで遊び始めた。

帰りの会の交流の場で A 子が家の中で遊ぶことが楽しかったと話をしたことから、家の中でどのように遊んだか、キッチン以外にも必要な物はないかなど問いかけたところ、S 男が「ピンポンするのがいる！」と話したのでインターホンを作ることになった。

次の日、家の中で遊んでいる子どもたちと相談しながら廃材でインターホンを作っていると、「何してるの？」と Y 男もその様子を見に来た。完成すると周りの子どもたちと一緒に Y 男も「ピンポン！おじゃましまーす！」と家に入り、衣装をつけコックさんになりきって楽しむ姿があった。

後日、電子レンジを作って家の中にそっと置いておくと Y 男を見つけ、一人で家の中に入り電子レンジに鍋を入れて遊び始めた。様子を見に行くと「今、あつたかくしてるの。チーン！」と言いながら、保育者と一緒にやりとりを楽しんだ。

〈捉え〉

家庭でごっこ遊びの経験が少なかったY男には、段ボールの家でどのように遊べばよいのかよく分からず、イメージがもてなかつたのだろう。そのためいつも遊び慣れているブロック遊びの方が魅力的だったのではないか。

〈考察〉

ままごとやごっこ遊びをする経験が少なかったため新しい環境にも興味を示さなかった Y 男だが、友達が遊んでいる様子を見ることでイメージが湧き、遊んでみたいと思ったのではないか。

直接誘い掛けて遊びに引き込むことが必要な時もあるかもしれないが、友達の遊ぶ様子を見せることや、保育者も遊びに加わって、やってみたいと思えるような雰囲気を出し出すことが大切であると感じた。

また、遊びを広げるために保育者から発信するばかりでなく、子どもたち自身にも問いかけ思いが出せるように関わっていくことも大切だと感じた。

Y 男にとって、インターホンや電子レンジができたことで料理を作ることが楽しみとなり、その楽しさが保育者とのやりとりに繋がった。

〈写真 2〉

【家の外観】



【家の中】



実践5. 友達を意識するきっかけづくり

「お寿司屋さんごっこ」：9月下旬

給食後、段ボールの家の中で料理を作って、おうちごっこを楽しむ Y 男の姿があった。

友達と関わるきっかけを作りたいと思い、保育者が家の中の様子を見に行くと、Y 男が声をかけてきた。

Y 男：「何がいいですか？」

保育者：「お寿司くださいーい！」

Y 男：「はい！玉子！（とお寿司の玉子を皿に乗せて差し出した）」

保育者：「なんかお寿司屋さんみたいだね。」

頭にお寿司屋さんみたいなまきまきしたやつつける？」

Y 男：「うん！」

K 子：「K 子もやりたい！」

そこで、不織布を編んで鉢巻きを作り、頭に巻いてあげると、Y 男は「やったー！」と言って K 子と顔を見合わせ笑い、お寿司屋さんになって遊んでいた。〈写真 3〉

その日の降園の準備をしている時に、Y 男と一緒に家の中で遊んでいた K 子に「明日も一緒に遊ぼう！」と声をかけ、初めて友達を遊びに誘う姿が見られた。

また、降園時には「K 子ちゃんと一緒に帰りたい。」と 2 人で手を繋いで、保護者を待つ姿も見られた。

〈捉え〉

ごっこ遊びの中で繰り返し保育者とのやりとりを楽しんできたことで、なりきって遊ぶ楽しさが感じられるようになってきたのだろう。

また、同じ鉢巻をしてお寿司屋さんのイメージを共有したことで、K 子に親近感がわき一緒に遊びたいという気持ちが芽生えたのだろう。

〈考察〉

“お寿司屋さん”をイメージできるような言葉がけをしたり、鉢巻きを作ったりしたことで、遊びのイメージが広がった。

またイメージを共有したことで、友達を少しずつ意識し、自分の思いを言葉にして伝えられたのではないかな。

〈写真3〉 【お寿司屋さん楽しいね！】



実践6. 子どものつまずきを理解する①

「運動会のリズム」:9月中旬

運動会のリズムで『お昼のヒーローおべんとマン』という曲を踊ることにした。9月初旬から自由遊びの時に室内で音楽を流し始め自然に曲にふれられるようにした。

始めは衣装を着けなくても、多くの子が繰り返し踊って楽しんでた。しかし、Y男は保育者や友達が楽しんで踊る姿を見せても全く踊ろうとせず、立ち尽くし友達が踊る様子を見ている日が続いた。

保育者がY男の近くで大きく動いて見せながら分かりやすく知らせたり、再度クラス皆でゆっくりと踊り方の確認をしたりするようにしたところ、手先や足が少し動いたのを見た。今がチャンスだと思い「Y男くん、いいよ！いいよ！踊れたね！」と声をかけた。それ以降少しずつ体を動かして踊れるようになってきた。

さらに子どもたちが楽しんで踊れるように、運

動会で使う、背中に弁当の具材を貼った衣装・星が付いた冠・エプロンなどを少しずつ出していった。新たな衣装を見つけると、多くの子が目を輝かせ、Y男も被ったり着たりして踊ることを楽しむようになってきた。後日、室内で踊り始める時にY男がS男に「手つなごー！」と声を掛け3、4人の子と丸くなって楽しそうに踊る姿が見られた。〈写真4〉

〈捉え〉

なかなか踊ろうとしなかったのは、踊りたくないのではなく、踊り方が分からなかったからではないかな。

〈考察〉

元々リズムが得意ではなく、体を動かして楽しむことができるようになるまでに時間がかかることがあった。何度も経験するうちにうれしそうに踊ることもあったので、始めは今回の曲がY男にとってはあまり好みのもではなかったのかもしれないと感じた。しかし、リズムの時にY男のそばで一緒に踊り、Y男の心の動きを探るようにしたところ、リズムそのものが苦手なのではなく体の使い方や動かし方が分からなかったため踊れなかったということに気づくことができた。また、保育者に褒められたことは自信につながり、興味を引く衣装などの環境構成によって友達と一緒に踊りたいと思えるようになったのではないかな。

〈写真4〉 【一緒に踊ろう！】



実践7. 子どものつまずきを理解する②

「給食」:9月中旬

偏食(特に野菜)があり、入園当初から好きな物(魚)は食べるが、嫌いな物が入っていると泣いて食べられないことがあった。

嫌いな物も少しでも食べて欲しいと、励ましながら極少量を口へ運んだり、励ましたりするなどしたが、なかなか食べられず、給食の時間になると表情が強張るようになってきた。

家庭での様子を聞くと、家庭では好きな物は自分から食べることが分かった。そこで、嫌いなものを少しでも食べて欲しいという願いより、好きな物だけでも食べて、皆と一緒に食べる給食が楽しいものにしてあげることが先ではないかと考え、いろいろな話をしながら楽しい雰囲気をつくり、「Y君どれだったら食べられる？「好きな物だけ食べていいよ。」と声を掛けるようにした。

すると、好きな魚を少量だが、自分から食べる姿が見られるようになってきた。「Y男くんすごいね～食べられたね！」と褒めたり、Y男が自分で食べることができた姿をクラスにも広めたりした。また、保護者にY男の姿を伝え、喜びを共有したり、家庭でも認めてもらったりするようにした。次第に、嫌いな物も少量ではあるが食べられる日が増えていった。パプリカが初めて食べられた日、帰りの会の交流の場で、皆の前に出て「給食が楽しかったです！」と話す姿があった。〈写真5〉

〈捉え〉

Y男にとって、家庭では好きな物は自分から食べるということから、食事の時間自体は苦痛ではないのではないか。しかし、保育者が食べられるようになって欲しいという思いで援助したことが負担となり、給食の時間が楽しいものでなくなってしまっていたのではないか。

〈考察〉

3歳児は、いろいろな味がわかり食べ慣れていないものについては、抵抗が大きくなる年齢であるが、苦手なものを食べてほしいという思いが先立ってしまったことで、給食への抵抗が大きくなってしまった。給食が楽しい時間となるよう、家庭的な温かい雰囲気づくりをし、好きな物でも少しでも自分で食べたという姿を見逃さず認めていくことで、給食が楽しいものとなり、苦手なものも食べてみようと思えるようになったのではないか。また、保護者にも給食の様子を伝え褒めてもらったり、周りの友達に認められたりすることで自信がつき、食べてみようという意欲や食べる喜びを知ることにつながった。

〈写真5〉【パプリカ食べられるよ!】



実践8. 遊びが広がる環境づくり

「病院ごっこ」:10月初旬～11月

おうちごっこで人形を使う遊びがクラスで広がっていたある日、人形を患者に見立て、保育者をお医者さんにして病院ごっこが始まった。その姿を見たY男もお気に入りの人形を持ち、Y男:「ちょっと足が痛いんです。」保育者:「じゃあ、お薬塗っておきますね。」と、お医者さん役の保育者とのやりとりを楽しんでいた。そこで絆創膏や薬、薬を入れる袋など子どもたちがイメージしやすいもの、子どもたちに身近なものを作り、遊べるようにした。するとY男は薬に興味をもち、自分から「はい、お薬どう

ぞ！」と薬を袋に入れて渡す役を始めた。

さらに病院ごっこが楽しくなるよう、保育者が新たに包帯、帽子、エプロン、体温計などを用意し患者や医者になり一緒に遊んだ。〈写真6〉

病院ごっこを繰り返して子どもたちが楽しんでいたある日、ブロックで遊んでいたY男に声を掛けてみた。

保育者：「Y男くん、見て！患者さんがたくさん並んじやって大変なの。Y男先生になって診てあげてほしいなー。」

Y男：「えー(照れた様子)いいよ！エプロンは？帽子は？(先生になるための衣装)」

保育者：「今、他の子が使っていないんだ…。」

Y男：泣いて怒ることなく先生役の椅子に座る。

保育者：「あっ！先生！患者さんが来ましたよ！」

Y男：「・・・」

保育者：「どうしましたか？って聞いてあげてください。」

Y男：「どうしましたかー？」

Y子：「足怪我したの。お熱もある。」

Y男：包帯で足を巻き、体温計で計りピッと音が鳴ると「できたよ。」と保育者に見せる。

保育者：「あら、大変！お熱が高いですね！先生、お薬出してあげてください。」

Y男：「・・・」

保育者：「あっちにいる看護師さんにお薬お願いします！って頼んだらどうでしょう？」

Y男：「おーい、お薬お願いしまーす！」

K子：「はい、はい！」

と、遊びの橋渡しをしながら楽しめるようにした。その後、エプロンと帽子が空いたのを見つけ喜んで身につけ、病院ごっこを楽しんだ。〈写真7〉

〈写真6〉

【薬】



【薬を入れる袋と包帯】



【注射器、体温計、絆創膏】



【レジ】



【ベッド】



【エプロン、帽子】



〈写真7〉

【お熱ありますか？】



【ポンポンしまーす！】



〈捉え〉

病院ごっこは生活に即した遊びだったので、自分が病院にかかった時のことと重ねて、イメージがもちやすく、やってみたいという気持ちがわき、簡単なやりとりをして楽しむことができたのではないかな。

〈考察〉

3歳児なりのなりきり遊びを十分に受け止めたり、経験からくるイメージを大切に環境を整えたりしたことで、楽しい遊びにつながったのではないかな。

子どもをよく観察、理解し、興味をもった瞬間を見逃さず、誘っていくことで、友達や保育者と一緒に遊びを楽しめるようになるのではないかな。保育者が関わるという人的な環境だけでなく子どもも持っているイメージがどのように遊びの中に表現されているかを理解しながら、そのイメージの世界を十分に楽しめるように、イメージを表現するための道具や用具、素材を用意し、子どもと共に環境を構成していくことが大切である。

実践9. 友達の思いに気づくことができる援助 「○△□鬼」:12月中旬

ごっこ遊びを通して友達や保育者と一緒に遊ぶ楽しさが分かるようになってきたので、簡単なルールのある遊びも楽しめるのではないかと思い○△□鬼を始めた。

その中で、Y男は“追いかけられたい、でも捕まりたくない”という気持ちがあったようで、追いかけることを喜び、あえて形の中に入らずに逃げ続けていた。しかし、いざ捕まると悔しくていつも泣いている姿があった。

繰り返し遊ぶ中で保育者に「捕まるのは嫌だったんだね。」「悔しかったね。」など、気持ちを受け止められることで、泣いて遊びに参加しないことが減り、悔しいという思いをもちながらも気持ちを切り替えて遊ぼうとするようになった。

ある日、S子が初めて捕まり泣いているのを見つけると、Y男が近寄りS子の方にそっと手を置いて顔を覗き込み、「悔しかったね。」と声をかけていた。このような姿は、入園当初には考えられなかった姿である。

その後も、泣いている友達がいると自分のハンカチを出し、涙を拭いてあげる姿があった。

〈捉え〉

Y男自身も捕まり悔しい思いをした時に、保育者に気持ちを受け止め励ましてもらった経験をしてきたことで、初めて捕まって自分と同じ思いを味わったS子の気持ちが分かり、声をかけに行っただけではないか。

〈考察〉

今回の○△□鬼だけでなく、入園してからこれまでに、保育者や友達と様々な心を動かす出来事を友達と共有したり、葛藤する経験をしてきたりしたことで、『～ダケレド、～スル』という気持ちのコントロールができるようになり、友達の思いに気づき関わろうとするまでに成長したのではないか。

V. 研究の成果と課題(○…成果 ●…課題)

研究内容①

エピソード記録と評価による幼児理解(捉え)

- なぜ泣いているのか、遊びに参加しにくいのかなど常にY男がとる行動の理由を探り、気持ちを受け止め理解していくことで、Y男に合った援助を考えていくことができた。
- 初めての集団生活を経験するので、子どものこれまでの生活史と現在の生活環境をふまえること、心の内面や行動の背景にあるものを深く読み取ることの大切さを改めて確認できた。
- 保育者が子どもたちの姿、「あの子はすぐに癇癢を起こし泣いて困る、4歳にもなっているのにまだ友達と遊べない」と評価してしまうのではなく、行動を引き起こしている目に見えない心の動きや願い、真実の訴えを理解していくことが大切だと感じた。
- 子どもと生活を共にしながら、子どもが今何に興味をもっているのか、何を感じているのか、何を実現しようとしているのかなど捉えを、他の保育者と話し合い多面的に見て、園生活を十分楽しめるよう検討、改善していく。
- 表情、仕草、言葉、行動から子どもの内面を読み取る力量を高め、子どもの実態に基づいた援助の工夫をしていく。

研究内容②

友達や保育者と一緒に遊びたくなるような環境の工夫

- 何かになりきり、みたくて遊ぶ3歳児の特徴を生かし、人形を使ったり、思わず関わりたくなるような環境を構成したりしていくことで興味関心を持ち、自ら関わって生き生きと意思を出しながら遊べるようになってきた。
- 子どもの思いを読み取り、見守ったり揺さぶったり、タイミングを見計らいながら援助してい

く大切さを、実践を通して再確認することができた。

○保育者との信頼関係のもと、子どもがやってみたくらいと思ったり、面白さを感じたりする気持ちに共感し、家作りや、病院ごっこを通して保育者も一緒になって遊ぶことで、友達や保育者と関わる楽しさ、一緒にいる心地よさを感じられるようになってきた。

●子どものイメージを誘導したり、固定化したりしてしまわないようタイミングよく玩具を提示したり、よく見極めた上で必要に応じた言葉かけができるようにしたりしていく。

●見守りすぎて遊びの質を高めるタイミングを逃してしまわないようにしていく。

研究内容③

発達の特徴を踏まえた指導・援助

○「自分が一番」「自分だけが～したい」と思いが強まる唯我独尊な3歳児の姿と、Y男の姿を重ね、Y男の気持ちに寄り添い受け止め、保護者と連携しながら関わっていくことで、信頼関係を築くことができた。また好きな遊びを遊びこむことで、友達に興味が向くようになり、友達と遊びを楽しめるようになってきたり、苦手なものを食べてみようとしたりするようになった。

○子ども一人一人の発達の特徴を理解し、その特性やその子どもが抱えている発達の課題に応じた指導、援助をすることが大切であると学んだ。

●一人一人、個性があり発達する速度も異なるので、子どもの心の動きを捉えた援助のタイミングや、見守りと介入のバランスを今後も学んでいきたい。

VI. おわりに

入園当初、不安や初めての集団生活で思いが通らず気持ちが落ち着かないY男に「どうしたら泣かずに安心して過ごせるようになるのだろう。」

「どのように関わったら友達に関心が向き、一緒に遊べるようになるのだろう。」と日々迷い、試行錯誤しながら接していた。常に新幼稚園教育要領に立ち返って考えたり、他の先生方と話し合い共通理解したりして実践したことで、子ども一人一人に合った援助をしていくことができた。

また、保育者自身も子どもたちがうれしそうに遊ぶ姿を想像し、ワクワクしながら考えたり、子どもたちと一緒に環境を作ったりしたことで、そのワクワクや楽しさが子どもにも伝わり、Y男だけでなく、同じように不安で泣いていた子、自分の思いを出せずにいた子もクラスの皆が安心して生き生きと遊べるようになった。

発達の特徴を踏まえ子どもを多面的に捉えた幼児理解をして思わずやってみたくいと思える遊びを考え、友達や保育者と一緒に園生活を楽しめるよう、保育者として日々努力をしていきたい。

参考資料

- ・『幼稚園教育要領解説』文部科学省
- ・『幼稚園・保育所・認定こども園「要録」記入ハンドブック』ぎょうせい
- ・『シリーズ◎子どもと保育3歳児』かもがわ出版